HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	悲哀に根ざした愛の教育観の形成 ： 新渡戸稲造とハリエット・Ｂ・ストウの比較研究
Author(s)	三上, 節子
Citation	基督教學, 45, 19-29
Issue Date	2010-08-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47478
Type	journal article
File Information	SC45_003.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

悲哀に根ざした愛の教育観の形成
―新渡戸稲造とハリエット・B・ストウの比較研究―

三上節子

はじめに

新渡戸稲造（一八六二－一九三三）とハリエット・B・ストウ（一八一一－一八九六）は互いに面識はない。しかし新渡戸はジュネーヴ大学での講演「一日本人のクエーカー観」（一九二六年）で、アメリカの奴隷制廃止へのクエーカー教徒たちの功績に言及し、「彼らの抗議の声はホイッティアーの詩に明快に表明されているし、彼らの奴隷解放活動への直接参加の模様は、ストウ夫人の筆によって『アンクル・トムの小屋』の中に不滅な形で残されている」[1]として彼女を讃えている。

二人は、距離的、時間的に大きな隔たりはあるが、期せずして類似した思考を持っていたことに驚く。二人の博愛主義的精神と行動を形成した背景に体験的、時代的、情報的共通性はなかったのか、また二人の精神と行動から今日学ぶべき点はないのかを考えさせられる。

本小論の目的は、第一に、二人の精神と行動の形成に与ったと思われる悲哀の経験とその克服に寄与した主な人物と思想を探ること、第二に、二人に影響を与えた人物と思想には類似点はなかったのか、または二人の思想と行動の今日的意義を探ることである。

第一章　新渡戸とストウにおける悲哀の果たした役割

第一節　新渡戸の悲哀の経験とその克服

新渡戸の主な悲哀には①一族の悲運と期待、②母の死、③長男遠益の死、④キリスト教信仰の深化における苦悩、があったと考えられる。

〈一〉一族の悲運と期待

南部藩士の子として三男五女の末子に生まれた稲造は、佐幕の子として、また二人の兄の病弱、早世により一族の期待を集めた。彼に少なからぬ影響を与えたと思われるものは、本人はそれを内面的深みのない助言だと言っているが、父の弟で元南部藩士の養父太田時敏が少年稲造にしばしば語った「お前は家の名誉のために偉い人物にならねばならないのだ、また代々仕えた殿様を辱しめぬために、旧敵官軍の人々を凌がねばならないのだ」[2]という言葉である。

〈二〉母の死

四歳で父十次郎と死別し九歳で養父の許に上京し、札幌農学校三年の夏に盛岡の実家に立ち寄った九年振りの母勢喜（せき）との再会（一八八〇年）が死後二日目という悲しみとなった。『衣服哲学講義』で彼は、その時恩師ハリス宣教師から譲り受けたカーライル（一七九五－一八八一）の『衣服哲学』（一八三三－三四）から大いなる慰藉を得たと語る。長男の死後に書いた義弟宛書簡（一八九二年四月二一日付）[3]では、『衣服哲学』の以下の三節が「長い間最愛の書物中の最愛の文章であった」と語る。

（一）　哀れな地球はささやかな喜びしかないものであるが、今や惨酷な継母ではなく、大事な母となった。人間というものは今まで欲の塊でその努力たるや賤しむべきものと思っていたが、その彼が私にはより愛おしいものとなった。そして彼の苦しみと罪悪のゆえに彼を兄弟よ、と初めて呼びかける心持ちになった。このようにして私はあの「悲哀の聖殿」（“*Sanctuary of Sorrow*”）の入口に立っていた。不思議な険しい道々を通って私もまたそこまで導かれたのだ。そして、まもなく、その聖なる門が開かれて、「神聖な悲哀の深み」（“*Divine Depth of Sorrow*”）私に明らかにされるであろう。[4]（かっこの英語表記はアポストロフィーも含め原文通り）

新渡戸はこの文章のおかげで聖殿におられる慈愛に満ちたキリストから深い慰めを受け、悲哀を克服し、また他者への同情心も育てられた。

〈三〉長男の死

婚約者メリー・エルキントンとアメリカで結婚し札幌農学校に赴任して一年後に生まれた愛児遠益（トーマス）は七日目で夭折した。その衝撃からの回復には母の死以上に時を要した。彼は上記（一）の文章のほかに以下の言葉から慰めを得たと、先の義弟宛書簡で語っている。

（二）　わたしの骨身にとおる、この苦しみ、この痛みは、いったいだれが察してくれるのでしょう。（中略）真実をご存じなのは、――聖母さまばかりでございます。（ゲーテ『ファウスト』第一部のグレートヘンの言葉）

（三）　もしキリストが人間の心の弱さに苦しみ耐えることをしなかったとしたら、また『悲しみの人』でもなかったとしたら、人間は苦悩を背負ってくれる数ある救世主に助けを呼び求めるか、苦悩する救い主を造ることす

らするでしょう。（G・エリオット『アダム・ビード』からの新渡戸の要約）

（四）　実に十字架に耐え、みだりに苦難の刺を抜き去らぬこそよけれ。魂の至高の富貴を失って、世の幸を得るこ
とのなからんがため。（新渡戸がアメリカで牧師の姉妹から教わったメソジスト教会の讃美歌）

新渡戸は「長男の死」を通して悲哀の目的を悟る。彼は（四）の詩句を再び引用し、随想「悲哀の用」（『随想録』一九〇七年）で次のように述べる。

一度ならず、悲哀の訪れを感じたことのない境遇や魂は不幸である。というのは、天はすべての生き物の運命として、すべての生き物が完全性を得るためにこの神の配剤を味わうことを望んでいるからである。悲哀は唇には苦いが霊魂には良薬である。(5)

そして彼は「悲哀の使命」（『人生雑感』、一九一五）で、悲哀には以下の四つの使命があると語る。

一．学問、哲学、常識等でも到底理解できない真理を教える使命
二．苦しむ者を助けようとする勇気を生み出す使命
三．弱者救済の事業を企て、その事業の目的を清める使命
四．他者の不幸に対して同情の念を起こさせる使命(6)

ところで、この精神はストウにおいても同様であったと言える。新渡戸は学校教育、雑誌・講演等による大衆教育、

国際平和活動、身近な人々との対話において、ストウは執筆活動、奴隷解放運動、後年はフロリダ州の黒人と白人のための小学校建設と教育、教会建設と伝道においてこれらの使命を、精力的に果たしたのである。

〈四〉キリスト教信仰の深化における苦悩

新渡戸のキリスト教信仰の深化には以下の五段階があったと考えられる。

（一）　東京英語学校でのM・M・スコット[7]の英米文学を取り混ぜた英語学習でキリスト教の神髄である愛・平等・自由に触れ、関心を持つ。

（二）　札幌農学校二期生で一番に「イエスを信ずる者の誓約」に署名する。

（三）　農学校在学中、神の存在を神秘的に求めたり、予定説に疑問を感じる。

（四）　アメリカ留学初期にメソジスト教会等に満足できなかった理由は、会堂や服装の華美さ、信徒間の人格的交わりの欠如、貧しい人への無配慮であった。[8]

（五）　留学中期ジョンズ・ホプキンズ大学一年に偶然クエーカー教会と出会う。

新渡戸がこの教派に惹かれ、クエーカー教徒となった理由は以下と考えられる。クエーカー主義は①先住アメリカ人や他の異民族を対等に扱う。②全ての人に内なる光が宿っている。人間は罪人ではあるが全堕落説のカルヴァン主義は取らない。万人救済主義。③教条主義ではない。毎週教会に行かなくても家庭で礼拝するも価値ありとする。[9]④宇宙大の広い視野で瞑想し神と対話する。言行一致に努力する。牧師制を持たない。儀式主義でない。⑤母国の文化伝統を尊重する教派。福音と引き換えに母国の文化を無理に捨てさせない。

彼のキリスト教信仰は一見、主要教派と一線を画するように見えるが、世界と日本のキリスト教会のあり方に本質的に重要な指摘を投げかけていると言えはしないだろうか。

第二節　ストウの悲哀の経験とその克服

ストウの主な悲哀には①四歳の時の母の死、②三男チャールズの死、③長男ヘンリーの死、④次男フレデリックの死、⑤キリスト教信仰の深化における苦悩、⑥作家と主婦の両立・女性の地位に関しての苦労、があったと考えられる。ここでは②、③、⑤を取り上げる。

〈一〉三男の死

ハリエット・ビーチャーは会衆派教会の牧師、名説教者、後神学校校長となる父ライマン・ビーチャーと、結婚前は監督教会（聖公会）の信仰で文学と家庭愛に富む母ロクサーナの七番目の子、四女として生まれる。神学校教授カルヴィン・ストウと結婚したハリエットは、一八四九年三男チャールズをちょうど一歳の時、町中に大流行したコレラで失う。他所にいた夫宛書簡に自らの大きな悲しみを述べた後で、

> 私はあたかも私のような悲しみはほかにはないかのように書いていますが、実はこの町にはエジプトの国と同じように、死人のいない家はほとんどないのです。(10)

と書き、ストウは自らの悲哀をすぐに同じ悲哀を背負う他者への同情に転換できているのはさすがである。

翌年彼女は「逃亡奴隷法」が成立するやいなや『アンクル・トムの小屋』の執筆を決心する。奴隷制廃止運動家で

作家のフォレン夫人宛書簡で「私自身のこの打ちひしがれた心を用いて、私が他の人々のために何か大きな良きものを作り上げるまでは、決して癒されることはないだろうと感じました」[11]と述べ、三男を失った深い悲しみが執筆の原動力であったことを伝えている。

〈二〉長男の死

長男ヘンリーは一八五七年ダートマス大学の一年の終わり頃、川で学友たちと遊泳中に溺死した。ストウはこの時ヘンリーがまだ堅信礼を受けていなかったことへの後悔の悲しみを味わった。というのは、当時会衆派や長老派教会ではカルヴァン主義神学に基づいて、堅信礼を受けていない者あるいは公に明確な回心の証がない者は死後地獄に行くと信じられていたからである。ストウは反奴隷制小説三作目の『牧師の求婚』（一八五八年）で、伝統的神学に疑問を投げかけ、抵抗している。

〈三〉キリスト教信仰の深化における苦悩

彼女の第一の信仰的苦悩は、十四歳の時父の牧会する教会で回心したにもかかわらず、長姉と新しい教会の牧師が彼女の回心を真摯に受け止めなかったことにある。四男チャールズは伝記でチャールズの言葉として、

（一）　カーライルが『サムエル・ジョンソンも心気症を患ったのである。すべての偉大な魂というものは、一般に、永遠へと向かう道々と天の水先人たる星ぼしが姿を現し、さらに人生の不透明な淵が上昇して彼らのために天空を織りなすまでは、深い暗闇を持ち、そのなかで過ごしがちである』と言っているのだから、ハリエット、暗い悲しみと憂鬱のなかにあっても、元気を出して[12]！

とあるように、ストウにとっては試練の時であった。なお、この記述からカーライルは当時アメリカでも非常に親しまれた作家であったことがわかる。

第二の信仰的苦悩は、第二の回心への道程で起こり、彼女の決心は以下の一八四二年夫宛書簡に示される。

> （二）私は今や神の恵みにより神の許に帰り、神のために生きる決心をしました。（中略）私たちはキリストのために何かをなし、苦しんだことがあったでしょうか？（中略）今週、聖霊による洗礼に与ったとき――これはキリスト者にとって最初の新生と同じぐらい現実的進歩を意味する「第二の回心」のことですが――この考え方の方向に導かれました。[13]

ストウの第二の回心は、新渡戸がクエーカー教徒として再出発して信仰的に自立していった過程によく似ていると思われる。

第三の信仰的苦悩は、彼女の信仰が、社会的弱者に愛の眼差しを向けるものに変えられていったことである。それはその時期に書かれた「彼は虐げられ、忘れ去られ、罪を犯し、苦しんでいる全階層の人々を同情と関心のなかに包み込んで描くことによって、人間尊重主義の前進のために実質的ではっきりと感知できる貢献をした」と、ディケンズ文学を讃えるストウの評論「文学の流行――その二」（“Literary Epidemics No.2,” 1843）に示される。

最後に第四の信仰的苦悩は、教派の変更である。女子教育家の長姉は、母の信仰へのあこがれ、婚約者が堅信礼前に海難事故で死亡した時の会衆派教会の冷たい見解、自らの神学研究によって、父の晩年に監督派教会に改派した。ストウも四人の子供と一緒に同様の理由で監督派教会に改派する。ただし、夫と四男、またストウの兄弟たちは改派せずに神の愛を強調する会衆派の牧師であり続けた。

第二章　影響を受けた思想と人物の類似性、二人の思想と行動の今日的意義

第一節　影響を受けた思想と人物の類似性

第一章でわかる通り、二人には生活した場所と時間においては隔たりが大きいが、情報的類似性は非常に高い。新渡戸は少年期から東京英語学校、札幌農学校等でストウが読み親しんだと同じ十八、十九世紀のヒューマニズムに富む欧米のキリスト教文学を読んで育ち、そこに慰めを見いだしていた。二人は好みが近く愛読書はかなり類似しており、第一章で掲げた作品以外に、シェイクスピア、セルバンテス、ミルトン、スコット、プラトン、J・S・ミル、ワーズワースなどもあり悲哀への同情が感じられる作品が多い。

新渡戸は神道・仏教・儒教、古歌等東洋思想からも学び、ストウは先住アメリカ人や黒人の作家・活動家たち、またオリエンタリズムからも学んだ[14]。つまり二人は、広く好奇心を持って新奇なもの、異質なものにも尊い価値を見いだし、暖かい眼差しと寛容さを備えていたと言える。

第二節　二人の思想と行動の今日的意義

今日世界で叫ばれている、「宗教の対話」、「自然との共生」という分野でも二人は草分け的存在である。二人は、行き過ぎたカルヴァン主義神学の弊害に悩んだ末、外見、地位、財産、能力、人種、信仰で人間を差別するのではなく、人間の平等、尊厳、人格の尊重、弱者への愛が大事だと結論づけ、行動した。

また、人間を万物の霊長と見なし高慢になるのではなく、自然界のなかの興味深い一生物として、他の生物との共生という見識も二人は持っていた。ストウは『椰子の葉かげ』（一八七三）で、フロリダの自然を見ながら「人間は自然界で人間の嗜好に合うものを何でも捕まえて食べる。なぜ、人間を丸ごと食べる生き物が現れないのでしょうか。

そうしたら人間も捕まえられる怖さを知るでしょうに」[15]とつぶやいている。また、新渡戸もカーライル『衣服哲学』の「自然とはいったい何だ。自然は神の生きた服ではないか、神は自然を通して我々に語りかけているのではないのか、我々も自然の一部ではないのか」[16]という自然の前での人間の謙虚さを諭す文言を愛していた。

さいごに

二人は自己の悲哀を通して他者の悲哀を理解し、できるだけ助けを差し伸べようとした。その悲哀に基づく愛の教育観は読書の量にかかわらず、自己の悲哀の経験から学ぶ姿勢があるならば、身に付くものだと考える。今日、我々もその教育観を身につけて、家庭、地域、自国、世界、地球、宇宙で一人一人が実践すべき時が来ているのではないだろうか。

注

（1）Inazo Nitobe,"A Japanese View of Quakerism," in *The Complete Works of Inazo Nitobe*, Vol.15（Tokyo: Kyobunkwan, 1985）, p. 345. 新渡戸のストウへの公の言及は私の知る限りこの箇所だけである。ただし筆者は二〇〇四年令孫とのインタヴューで、新渡戸が『アンクル・トムの小屋』の英文絵本を各種孫たちに与えてその内容を話してあげていた旨をお聞きしている。

（2）Inazo Nitobe, *Reminiscences of Childhood in the Early Days of Modern Japan*, in *The Complete Works*, Vol.15, p. 524.

（3）Inazo Nitobe, "A Letter to Brother Joseph, April 21, 1892," *Letters to the Elkintons*, in *The Complete Works*, Vol. 23, pp. 561-564.

（4）Thomas Carlyle, *Sartor Resartus*（London: Ward Lock & Co. Ltd., 1911）, p. 203.

（5）Inazo Nitobe, “The Uses of Sorrow,” *Thoughts and Essays*, in *The Complete Works*, Vol.12, p. 320.

（6）新渡戸稲造「悲哀の使命」『人生雑感』（『新渡戸稲造全集』第十巻、六二―六六頁）、教分館、一九九一年。

（7）平田宗史『エム・エム・スコットの研究』風間書房、一九九五年、二七五―二七六頁、三上節子『悲哀に根ざした愛の教育観―新渡戸稲造とハリエット・B・ストウの比較研究』麗澤大学出版会、二〇〇八年、一五八―一六〇頁、参照。

（8）Inazo Ota, “Friends’ Mission in Japan,” *The Friends’ Review*, Vol.39. No.26, 1886, and “Why I became a Friend,” *The Interchange*, Vol.3, No. 3, in *The Complete Works*, Vol. 23, pp. 210-2 & 242-5; “Religious Impressions of America,” *The Friend’s Review*, Vol.40, No.16, Nov.18, 1886, in *The Complete Works*, Vol. 12, pp. 370-5.

（9）メリー夫人は東京時代、多忙と健康の理由でほとんど教会には行かず、家庭で個人的に礼拝を守っていたという。

（10）Charles Edward Stowe, *The Life of Harriet Beecher Stowe, Compiled from Her Letters and Journals*（London: Sampson Low, Marston, Searle & Rivington, Limited, 1889）, p. 124.

（11）*Ibid*., p. 198.

（12）*Ibid*., p. 38.

（13）A Letter from Harriet B. Stowe to Calvin E. Stowe, September 4, 1842, folder 67 Beecher-Stowe Collection, Schlesinger Library, Radcliffe College.

（14）三上節子、前掲書、一六一―一六八頁、参照。

（15）Harriet B. Stowe, *Palmetto Leaves*（Gainesville, FL: University Press of Florida, 1999, Reprint. Originally published: Boston: J. F. Osgood and Co., 1873）, p. 60.

（16）Thomas Carlyle, *op. cit*., p. 202; 新渡戸稲造『衣服哲学講義』（『新渡戸稲造全集』第九巻、二一三頁）、参照。